2017年10月14

老子会会報

第 001号
老子会 主催

老子会のモットー

「老子の道の精神を生かし、自分を変え、世界を変え、未来を変える」をモットーに、世界平和・人類の幸福を推進していく。

「大器晩成」「上善は水の如し」「和光同塵」「怨みに報いるに徳を以ってす」という中国人にも日本人にも、乃至世界の人々にも親しみ深いこれらの金言・格言は、みな『老子』が出典である。

『老子』は二千六百年もの昔に著され、わずか五千四百七十六文字で、八十一章からなる薄い書物ではあるが、非常に難解な書物でもある。

深遠な「道(タォ)」の思想を説き、「無為自然」を治世や処世の根幹とした『老子』は、争いに満ちた現代を生きる上でも多くの示唆を与えてくれるものは多々ある。『老子』の言葉が、なぜ人間の生き方・考え方に深い影響を与えたのか。本老子会では、『老子』をめぐる基礎知識の解説と、章毎に分かりやすく現代語に翻訳し、説明を行うことを通して、老子本来の哲学思想や主張は何であったかに迫っている。

『老子』の独特の思想世界を理解する上で、現在社会でどう生かすかについて、一方通行的な講義方法を避け、学習者からの積極的な発言により、楽しくて勉強になる学習会に作り上げている。すでに四年間続けてきたが、諦める・やめるところではなく、勢いが増して、参加者が増え続けている現在のところである。また、毎回参加者からのミリ講演も実施している。勉強会終了後の懇親会も盛り上がり、参加者間の交流・友情を深めている。

老子会は人生を考える学習会としてのみならず、知的好奇心を刺激する学習会としてもおすすめしたい。「大器晩成」「上善は水の如し」「和光同塵」「怨みに報いるに徳を以ってす」という中国人にも日本人にも、乃至世界の人々にも親しみ深いこれらの金言・格言は、みな『老子』が出典である。

『老子』は二千六百年もの昔に著され、わずか五千四百七十六文字で、八十一章からなる薄い書物ではあるが、非常に難解な書物でもある。

深遠な「道(タォ)」の思想を説き、「無為自然」を治世や処世の根幹とした『老子』は、争いに満ちた現代を生きる上でも多くの示唆を与えてくれるものは多々ある。『老子』の言葉が、なぜ人間の生き方・考え方に深い影響を与えたのか。本老子会では、『老子』をめぐる基礎知識の解説と、章毎に分かりやすく現代語に翻訳し、説明を行うことを通して、老子本来の哲学思想や主張は何であったかに迫っている。

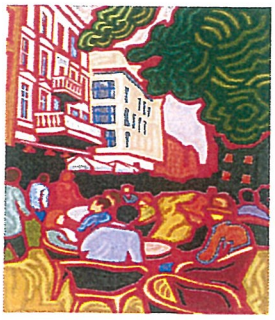
『老子』の独特の思想世界を理解する上で、現在社会でどう生かすかについて、一方通行的な講義方法を避け、学習者からの積極的な発言により、楽しくて勉強になる学習会に作り上げている。すでに四年間続けてきたが、諦める・やめるところではなく、勢いが増して、参加者が増え続けている現在のところである。また、毎回参加者からのミリ講演も実施している。勉強会終了後の懇親会も盛り上がり、参加者間の交流・友情を深めている。

老子会は人生を考える学習会としてのみならず、知的好奇心を刺激する学習会としてもおすすめしたい。

(胡　金定)

老子会「新潟研修会」に参加して　　山本隆敏

今回の研修では、白滝酒造と漢字の里「諸橋轍次記念館」を訪問して、老子に関わる勉強を深める目的があったと思います。



私は、北陸にはまだ行ったことがないので、上越新幹線の初試乗と白滝酒造の大吟醸を味わえば、といった単純な気持ちで参加させていただきました。ところが、この勉強会は、私にとって想定外の大発見の研修会となりました。

知識だけの学びではなく、実践が伴わねば生きた学問となりません。論語の「学びて思わざれば則ち罔し」の実践版として、老子“道”の実践ができたと思える、本当に意義深い実りの多いものとなりました。

一日目の、白滝酒造では、酒蔵見学の後、酒の試飲コーナーで、大吟醸を試飲したわけですが、私は、今から１８年近く前に、山口県の周東町にある“獺祭”の旭酒造を訪問した時のことを思い起こしたのです。

当時、日本酒は右肩下がりで、日本酒に未来はあるのか、と誰もが不安を抱いていた頃です。

当時、私はベアリングの製造設備の販売・技術指導に関わり、“ものつくり”についてこだわりを持っていたこともあり、友人が面白い会社があるよ、と教えてくれた旭酒造を見学に行ったのです。

酒蔵見学の後に、桜井社長と話をすることができ、“獺祭”開発の苦労話を聞きながら、勧められた２割３分磨きの獺祭を味わいました。

グラスを近づけ、一口口に含んだ時の、“脳天を突き抜けるような芳香性”とその後口内に広がる独特の味わいに衝撃を受けたのです。

私は思わず、叫びました。

「これは、ほとんどワイン！日本酒として考えるより、ワインとして考えれば、フランス料理と合いますよ。フランスでデビューする気はありませんか」

すると、桜井社長は、笑みを浮かべながら身を乗り出して、応えました。

「実は、今、私もそう考えている。狙いの市場は米国だが、フランスで食品コンクールに出して、そこで評価を得たら、道は開けると思っている」「絶対やれますよ。頑張ってください！」

と言って固い握手をして、旭酒造を後にしました。

それから、半年位経った頃、パリの食品コンクールで“獺祭”が優勝したというニュースが東京に入ったのです。六本木界隈で騒がれはじめ、それから旭酒造の快進撃が始まったのが思い起こされます。

この大吟醸「上善如水」も、中国に狙いを定めれば、大吟醸が持つ強い芳香性が老子の言葉を思い起こさせ、きっと人々の心を惹きつけること間違いないだろう、などと考えながら味わっていました。

後から人に聞くとこの時、試飲コーナーの窓には“素晴らしい虹”が広がっていたそうです。

二日目は、諸橋轍次記念館を訪問したのですが、かの１３巻に及ぶ「大漢和辞典」を完成させた、その偉業を学べる資料館でした。

どんなに偉大な仕事をする人でも、一人ではできません。では、どのようにして、学問の人・学者が、この事業を成し遂げたのか、それが私の大きな関心でした。

リニューアル記念特別講演会の「諸橋轍次と岩崎小弥太」というテーマで諸橋晋六氏（諸橋轍次の三男で、三菱商事社長、会長を歴任）が講演された内容が、小冊子でまとめられています。明治を生きた人たちの凄さを、感動の思いで読ませていただきました。

この二人は、まさに無縁の世界に住んだ人ですが、この二人の生涯を通じ、諸橋にとっても岩崎、岩崎にとっても諸橋、というほど切っても切れぬ深い因縁になり、それが日本の歴史を動かすことになったというお話です。そして、それは明治、大正、昭和の歴史を俯瞰して日本国と日本人を理解することが出来る視点を与えてくれます。

昼食の時、余りにも面白いので、出てきた“ネギトロ丼”にも箸がつかず、読み耽っていたら、石井事務局長に「列車に乗り遅れるよ」と注意されたほどです。

でも、このような賢人たちがいたからこそ、敗戦時に、「日本語を廃止してローマ字・英語に切り替えて日本の再生を図る」という議論が沸騰した難局を乗り越えることが出来たのだと、本当にありがたく思えます。

さて、一連の行程を無事に終えて帰路に着くときのことです。
金沢駅で、１８：４２発“特急サンダーバード”で大阪に帰る予定でしたが、１２名の団体行動でチケットが取られているので、個人の自由行動にはいろいろと制約があります。
出発時間まであまり時間的な余裕がない中、席取り確保担当と弁ビール・つまみの購入担当を決め、残りは各人でお土産などを買うことになったのですが、お店に入ってみると、時間が遅いこともあり、気に入った弁当は売り切れで、別の弁当屋を探したりしてようやく見つけてレジに並んだら、今度は長蛇の列に並んで待たなければならない状況でした。
皆さん、時間を気にしながら、本当にヤキモキしていたことだと思われます。
私は、早めに改札口に来たので、切符係の塚本女史と、胡金定先生や金女史等を待っていました。
出発時間が迫ってきますが、あと３０秒という時間になった時、ホームにいる石井氏や部田氏、まだ見えない胡金定先生と金女史の顔が思い浮かび、これは今回の最大のピンチ。
間に合わなければ、最大の楽しみだった車内懇談会ができなくなる。次の列車にすれば、グループはバラける。まさに、絶体絶命の大ピンチ。
ふと、思い浮かんだのが、「老子がこういう局面に遭遇した時どう行動するだろうか」です。
本のサイドカバーと目次のタイトルがチカチカと脳裏をかすめます。
「バカに見えれば本望なのだ」「欲がないと静かなのだ」「バカを貫くのだ」「なるようになるのだ」・・・・・・
突き詰めていくと、「真の心で、今できることを尽くす」これ以外にやりようがない。
人は、自分が窮地に追い込まれると、怒りと同時に、自分を正当化したいという本能的なものが出てきます。しかし、それをそのまま言動に出すと、結果として相手を責めることになり、それを聞いた相手は嫌な気持ちになります。
いったん嫌だなという気持ちが起こったら、どんな真理であろうと、正義であろうと、相手を受け入れる気持ちは起こりません。
だから、老子の言いたかったことは、「自分が窮地に陥った時、相手を絶対に嫌な気持ちにさせるな（ゴマをするとは異なる）。それが出来たら、自然と道は開ける」。そのためには、心身を磨けということではないだろうか。

この３０秒間は、極めて短い時間ですが、今回の参加者全員がそれぞれ真剣に向き合った時間ではなかったかと思います。
また、５４章の「どう生きるかがその人なのだ」の意味がわかったような気がします。
当初の列車には遅れたものの、ホームに上がってから、今後の計画変更について、駅員を交えて知恵を絞ったら、小松駅で合流できるということが判明。本当に一筋の光が差し込んできたような思いがしました。
この間、いろいろな言葉が飛び交いましたが、印象に残っているのは、一言として相手を責める言葉がなく、また、胡金定先生が車中で言われた「怒らない」の一言の重みです。
小松駅で合流できた時の喜びは、歓喜の中の大歓喜ともいえるもの、これほど感動に満ちた再会は、私の人生ではありません。
今回の研修会は、胡金定先生、石井事務局長、塚本女史ほか関係者のご尽力の賜物だと大変感謝しています。特に帰路・金沢駅でのハプニングは、私の理解する老子“道”の実践が、老子会のメンバーで実証できたのではないかと誇りにさえ感じました。
そこで、合流した小松駅で、私の感じたところを胡金定先生に申し上げたところ、老子の教えの合格レベルにあるとのありがたいお返事を頂いたこと、皆さまにもお伝えしたいと思います。
老子会万歳！
以上、老子「新潟研修会」の随筆・紀行文としてご報告させていただきます。

人生に飛躍する二日間　　狭間　信行

二〇一七年六月二日、早朝に車で東京信濃町を出発して、関越自動車道を楽しみながら、胡金定先生が主催する「老子会」のみなさんに合流するのがとても嬉しく急行していました。素晴らしい青空の中を走らせていました。やがて谷川岳を望みながら、透き通るような天空と深緑の木々を抜けて、谷川岳の下をくぐる長い関越トンネルを潜り、湯沢ＩＣを降りて、時間を図って燕三条まで走りましたが、早く着いたようで、目の前に今回の目的地の一つ「上善水如」のブラントをもつ白瀧酒造の酒蔵が有ります。

老子会のみなさんはまだ新幹線でこちらに移動中だと、石井政事務局長に確認しました。みなさんを待っている間、老子の教えを学ぶ中で、人生としての生き方を大切にして行動に移しながら、これからの人生に生かしていくことが重要だと深く決意をし直しました。

結局、雨が降り出したことや合流までにかなり時間がかかりますので、事務局長と協議して、私一人で先に燕三条のアパホテルに移動して頂きました。ホテルで合流することにしました。夕刻みなさんがホテルに到着しました。チェクインして、一時間の老子を勉強してから、待望の懇親会に迎えました。懇親会のみなさんは明るくて、お互いに心に残る時間を大切にして、語り合いました。二次会はラーメン大会でした。

二日目は新潟の偉人諸橋轍次の故郷を訪ねに行きました。諸橋先生は生涯をかけて漢学の研究に費やしました。日本漢学界や世界初の『大漢和辞典』の編纂に功績を残しました。また、漢詩の創作や高等学府での教育、人材育成に甚大な貢献を成し遂げました。後人は彼を記念するために生家の近くに「漢字の里　諸橋轍次記念館」を作りました。今回の二番目の目的地であります。生憎朝から雨です。四苦八苦で「漢字の里　諸橋轍次記念館」に辿り着きましたが、みんな雨に塗られて、びしょびしょでしたが、みんな笑顔で先人の功績を見て、尊敬の念を持ちました。

記念館の映像室で諸橋の生涯を紹介する映像を見て、気持ちを揺らされる感動を覚えました。諸橋の座右の銘に大道をまっすぐに進む、小道は近道に見え、変化の魅力をもつが、やがては行き詰まる「行不由径」というものである。

今の時に自分の人生に勇気と目的に対して一つの方途を教わった気がします。胡金定先生から生まれる情熱を重ねて、老子の持つ教えとは、生命の深層部にある自分の生命と宇宙の生命が合致することの大切さを感じ取り、一切の生き方の原点として、日々生きていく自身の基軸にする生き方であろうと思います。

昼食を共にして、二日間の収穫を語りながら、締めくくっていましたが、みなさんとお別れを告げて、私一人で再び「漢字の里　諸橋轍次記念館」に戻り、静かな時間を過ごしました。

この二日間、みなさんと過ごした時間は有意義で、私のこれからの人生に大事にして生きていくと実感しています。

最後に胡金定先生、大切な老子会の友人のみなさんの益々の人生発展を祈るものであります。本当にありがとうございました。

老　子　会

〒658-8502
神戸市東灘区岡本8-9-1
甲南大学　国際言語文化センター　胡金定研究室

電話: 078(435)2353
FAX: 078(435)2545
E-mail　kokintei@center.konan-u.ac.jp